インタビュー

コロナ禍のオーガニック市場を語る

SDGsでフォローの風

自然食もプチ贅沢などで回復

Interview

「食と健康」についてかつてないほど注目が集まっている。言うまでもなく新型コロナウイルスによる影響大で、生命危機を目の当たりにした世界中の人が改めてたどり着いた命題かもしれない。免疫を高める食品を求めて様々な情報が飛び交っている。サプリメントは勿論、日日の食べ物にも目が向けられている。自然食品、オーガニック食品もその例に漏れない。特に欧米ではオーガニック食品が科学的根拠をもとに健康効果を前面に出した動きが目立っている。わが国でもこれらの食品が沈滞気味の業界を引き上げる効果を見せている。今回は杢谷正樹氏（全日本健康自然食品協会理事長、純正食品マルシマ社長）にコロナ禍における自然食品、オーガニック食品がもたらした影響について聞いた。

杢谷正樹氏
全日本健康自然食品協会理事長
純正食品マルシマ社長

―欧米でオーガニック食品に新しい動きが出てきているようですね。

杢谷　最近欧米では作用機序とまではないですが、臨床試験やデータ上でオーガニック食品は免疫機能が高まっているというケースがたくさん発表されてきています。日本では考えられないくらい進んでいるようです。

―わが国でいえば機能性表示食品制度の生鮮品を思い出しますが、それとはレベルが違うようですね。果物や野菜といった生鮮品も機能性表示ができますがそれらは臨床試験を行ったものではありません。すべてがシステマテックレビューによる長年の食経験によるものですから。

また昨年、野菜果物の機能性表示に関する実証実験が認定されています。POPや広告、店頭のQRコードと関連付けた情報紹介サイトに表示できるというものです。オーガニック産品ではないですがこのような動きもあります。

杢谷　海外では大学が研究して論文まで発表されている。オーガニックで育てられ添加物の入らない食品と、そうでない食品を食べたグループを比較すると前者のグループの方が免疫力が高いという結果が発表されています。また、ヨーロッパの研究機関で行われた動物実験から有機作物を摂取した動物はその子孫の免疫力まで高めることが明らかになっていると言います。我々もそういう風にならなければと思っています。

―かねてより薬務サイドはあきらか食品に関しては効能効果問題で関知しないといっていました。明らか食品であれば過剰摂取も起きないでしょうし。法的な面から言ってもこの分野は期待できます。

欧米では野菜の免疫力を前面に

杢谷　我々、自然食というのはとかくイメージでやってきました。また、宗教的であったり生き方であったりしました。科学的に語ることを避けていたようなところもありました。それをエビデンスを用いて訴求しようとしているわけです。何故かというと病気直しから、健康維持、病気予防さらには今や幸せを訴求する食が我々のマーケットになってきているからです。自然食品専門店も病気直しの人はもう来ないです。店舗に来店するお客様も健康維持か痩せたい、綺麗になりたいという人が大半。健康へのプラス思考の人が自然食やオーガニックを求めているようになっています。

―そもそも店舗自体が少なくなってきているのではありませんか。確かに昔は玄米菜食でガンを治すことを訴える店舗はありましたが今は殆どないでしょう。一部クローズドマーケットで会員制にして共通の理念のもとに病気直しの食品を扱っているグループはありますがそれは殆どサプリが対象です。

杢谷　かつての森下敬一先生のようにカリスマの先生がいてそれに商品がぶら下がっているというケースがあったのですが今はそんな店舗展開をする人はいません。今はSDGsとプラントベースが主体になってきています。大手企業も大豆ミート等で大々的な動きを見せているように思います。ベジタリアン向けに多くの商品が出ていますが完全にオーガニックとベクトルは一緒だと思います。つまり食べて自分が健康になるのと環境配慮型食品としての側面ももっています。肉を食べないことで環境負荷に貢献するというものですね。自分も良くて世の中のためにもなる。こういう事をしっかり行っていくという事です。

SDGs達成をオーガニックで

―自然食業界では創健社がここ数年プラントベースを強く打ち出しています。

杢谷　弊社も創健社のプラントベースに乗って同じマークを使わせてもらっています。創健社も自社のマークが広まればよいわけです。既に5アイテム以上はマークを付けています。ビーガン、プラントベース等商品ラベルに文言が色々書いてありますが、それらは環境やサスティナビリティに貢献している商品との意識が半分以上あると思います。オーガニックの目的は持続可能だと思うので完全にSDGsを達成する一つの手段としてオーガニックがあると思います。

―コロナ禍において自然食品も大いに恩恵に浴したと思いますが実際のところはどのような商品がどれくらい伸びているのですか。

杢谷　生協の宅配が110%以上と最も伸びていると思います。次いでスーパーマーケット、インターネット、地場スーパー。その中に自然食品店もあります。中身としてはこだわり。外で食べることがままならず外食費はゼロですから。その分地場の店舗が活用されたと思います。縮小したのが百貨店、GMSショッピングモールなどです。

―緊急事態宣言が解除された後で状況が変わってきていますか?

杢谷　自宅で、食べて飲んで寝るという安心できるパターンはそう簡単に元に戻らないのではないですか?少しは高価な食べ物に費用をかけてでも家での食事に慣れていっているように思います。言うところのプチ贅沢ですね。この中にオーガニックも入っています。今まで手の出なかった食材に手が出るようになっています。

―オーガニックスーパーなどは存在感が顕在化してきています。

杢谷　ビオセボンなどはいいです。発表はしていませんが弊社では取引高で20%アップになっています。ビオセボンは、立地の良い場所に出店してミドルより上のアッパー狙いが奏功しています。最近は店舗も着実に増えています。

―何が売れているのですか?

杢谷　実際に売れているのはレトルト食品やフリーズドライ、料理しているもどきの品。毎日自宅で食事をするとなるとどうしても簡単なものを多く取り入れるのではないのでしょうか。プチ贅沢ではありますがそこには簡便さは欠かせない。

コロナ禍で免疫訴求の製品も健闘しています。腸活、乳酸菌、大豆ミート、マヌカハニーなど。マヌカハニーは高額ですが売れ筋になってきています。相当なマーケットになっているとおもいます。千数百億円市場にはなっているでしょう。それとプロポリス。これも人気ですがマヌカハニーと比べると匂いや味の面で好みが別れます。この他、食物繊維、発酵食品は語りやすい、表現しやすい商品です。

―これから有望な商品はありますか。

杢谷　「オーガニックワイン」や「有機酒」が誕生するかもしれません。農水省管轄の有機JAS法では酒はありませんが、酒の管轄である財務省がやっと腰を上げました。何故かというとヨーロッパからオーガニックワインがたくさん輸入されているから。欧米にはオーガニックのアルコールがありますが日本にはないのでルールを作ろうと財務省が動いているということです。ルールが無いことで自称・有機の酒、オーガニック酒といったケースも見られるのでその点も整理されます。そもそも業者にすれば海外に有機ワインがあってなぜ日本酒に認可された有機酒がないのかという思いはあるので、酒の基準が出来るという事は有機の市場認知度も上がり歓迎ですね。

―一方で、業務用はだいぶダメージをうけているようですね。レストランなど飲食店では店舗が開けられない状態でしたから当然と言えば当然でしょうが。

杢谷　弊社の醤油は、料理屋さんなどで一升瓶が使われていたのですがこれがガタ減り。小さめの容器に代わっていきました。一般家庭でも煮たり炊いたりはしなくなりました。醤油は刺身にかけるくらいしか使わなくなっている。今、一升瓶を抱えて煮物に振りかけるような使い方はしませんから。

―ムソーさんが発表していましたが、自然食専門店は下げ止まりしました。自然食の個店の数は減っていない。売上、店舗数ともに下げ止まりということです。

杢谷　昨年の3月、4月の巣ごもり時が特によかった。今年は昨年の同期と比べると少し減っていますが、一昨年対比でみると105%はいっていると思います。

専門小売店のサンピュアでは、「SNSを使って発信した結果、従来のお客さんに加えて若くて新しい層が増えている」といっていました。やはりそれらのお客さんは病気直しでなくキレイになりたい、痩せたい、年を取りたくないといった予防的見地から来店しているとのことでした。

欧米の研究機関によるとエビデンスに裏付けされたオーガニック食品は基礎疾患の予防に期待がもてるという

緑の食システムで有機圃場100万ha

―いずれにしましてもオーガニックや自然食品は今後もフォローの風が吹きそうです。

杢谷　今後は農水省の動きが注目されます。「緑の食料システム戦略」というのを先ごろ発表しました。2050年までの目標として、有機農業の圃場を100万ヘクタールに拡大するというものです。これは日本の全圃場の25%。現在1%ですから壮大な話です。これも世界がSDGsを推進しているから。ヨーロッパが2030年までに25%を有機の圃場にすると言っていますからこれに対応したものだと思われますが、やるからには補助金でもつけて早く実施に移してほしいものです。

―持続可能な世界の実現のためには企業もESG(地球、社会、統治)の3つの観点は外せなくなってきていますからね。

杢谷　ノーベル物理学賞を受賞した真鍋淑郎先生も地球温暖化予測理論でした。ノーベル物理学賞に気候研究が選ばれるのですからこれも全部つながっていると思います。この大きな流れには我々もぜひ乗りたいものです。